

# 09 PELSTE2021 (授業研究部門) の活動報告

※Peace Education and Lesson Study for Teacher Educator

## 活動の背景

2020年教育ビジョン研究センター(EVRI)は、INEI※加盟を記念して、また東アジアにおける教育学研究の拠点構築を目指してPELSTE2020を実施した。2021年は、広島大学学内INEI委員会とEVRIが連携し、前年度のノウハウと成果を継承し、またコロナ禍の影響を踏まえて、INEI加盟大学とオンラインで連携・交流を深める特別プログラム「PELSTE2021」を企画、開催した。

※International Network of Educational Institutes



## Purposes — 目的

- 1 広島大学が「平和教育」と「授業研究」の国際的な(東アジアの)研究拠点として発展し広く認知されるように、海外の研究者に同分野の研究・教育の動向と研究交流のプラットフォームを提供する。
- 2 共同研究のシーズを発掘するとともに、「平和教育」と「授業研究」の研究交流のためのデジタルコンテンツを蓄積する。さらに3年後のINEI年次総会・広島開催に向けての準備を進める。

## Participant & Audience — 参加形態

参加者 3名 + 参観者計 86名

INEI加盟大学より公募。  
平和教育部門3名、授業研究部門3名。  
デジタルコンテンツを活用した事前協議を踏まえてシンポジウムで報告を行う

シンポジウムの参観者。

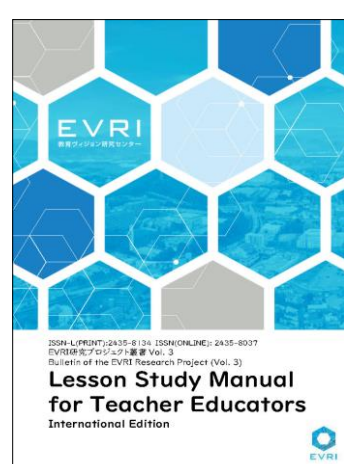
## Preparation — 授業研究部門プログラム (事前協議)

シンポジウムでの提案に向けて、4つのKey Questionsのもと、参加者は事前に共通のデジタルコンテンツを視聴し、協働して分析と議論を重ねた。

### ▶ Key Questions

1. 広島では、授業研究を、何のために、どのように実践してきたか?
2. あなたの国・地域の仲間は、授業研究を、どのように受けとめ、実践してきたか?
3. 授業研究の強みとは何か、どのような新たな展開が見込まれるか? (追加された問い)
4. あなたは授業研究を、誰と、どのように共有したいか?

### ▶ 事前協議資料



国際版教師教育者のための授業研究マニュアル



教員養成における授業研究(動画)



現職教育における授業研究(動画)



授業研究を軸にした教師教育(動画)



▲事前資料はこちら



▶ You Tube動画

## Symposium — 授業研究部門プログラム (シンポジウム)

「授業研究」の教師教育上の意義と課題を意見交換した。

### ① コーディネーターによる趣旨確認



吉田成章(PELSTE2021 授業研究部門コーディネーター)より、本部門では「授業研究を、誰と、どのように共有したいか?」との共通の問いの下、参加者それぞれの個人的・文化的・社会的文脈を踏まえて、授業研究の意義と課題について意見交換したいとの趣旨が述べられた。

### ② 3名の参加者による提案

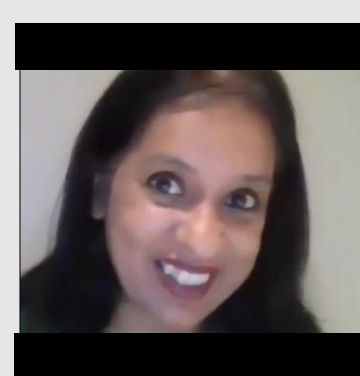


アグナルド・アロイオ氏  
(ブラジル・サンパウロ大学)

PELSTE2020に参加時の議論や学校訪問を踏まえ、日本の授業研究の伝統からブラジルへの示唆を導いた。文化的・社会的に傷付きやすい状況に置かれた学校・教師・子どもが多い地域の課題に応えるべく、現職教師教育プログラムの変革と学校コミュニティの形成を通して、教師をエンパワーする道筋を提案した。

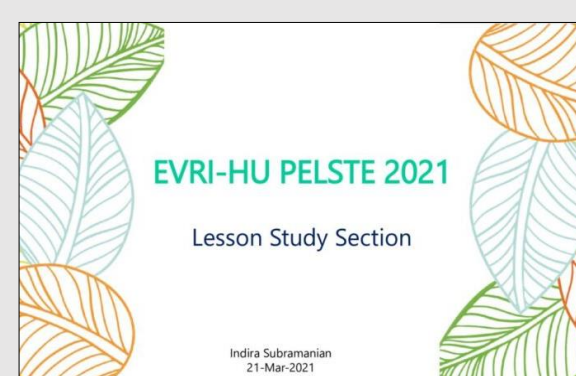


▲発表資料はこちら

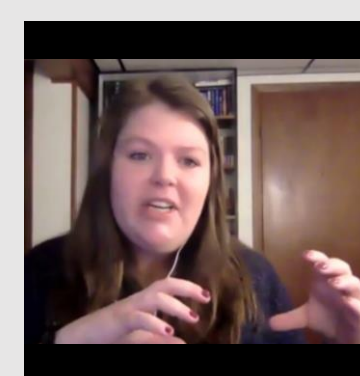


インディラ・ズブラマニアン氏  
(シンガポール・南洋理工大)

授業研究は、インドの教師教育システムの構造的・体系的課題に対して持続可能な形で応答しうることを指摘した。新しい土地で授業研究を始めるときに経るべき「6つの問い」を提案し、教師の民主的協調と協働の重要性を強調した。また、文脈を無視した「教育借用」を乗り越えていく必要性を提起した。

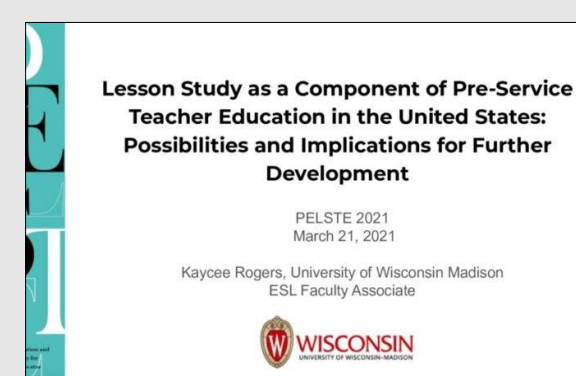


▲発表資料はこちら



ケイシー・ロジャース氏  
(アメリカ・ウィスコンシン大学マディソン校)

米国の教員養成の現状を受けて授業研究についての意義と課題を論ずるとともに、授業の「実践」「批評」「改善」のサイクルを繰り返すことの重要性を提起した。授業研究を通して教員が教科横断的に交流することに力点を置き、それを通して学習者の学びを多層的・多角的に捉えていく可能性を指摘した。



▲発表資料はこちら

### ③ ディスカッション (コーディネーター: プレット・ウォルター, 金鍾成)

#### 前半

授業研究が1つの「educational formula(教育の(成功)方程式)」として語られやすいことをめぐって議論が展開された。成功の物語となりやすい授業研究に批判的な対話をもたらすためには、成功の「尺度」を再検討すべきことを確認。さらに、3名の提案に投影された文化的な「再文脈化」の重要性と、再文脈化のための具体的な方法論が議論された。

#### 後半

(参加者らも参加)

授業研究には、①教師の教育経験を「体系化」する力があること、②ブラックボックスだった教室内の授業実践を教師の「共同探究の対象」に転換していけること、③子どもと教師がもたらす教室内の多様な文化の存在を「発見」し、授業づくりに「結び付けていく力」があることなどが確認された。また、しばしば授業研究で約束される「成功」の物語を批判的に問うていくことの重要性が確認された。

## Results — 成果

参加者からは、以下の評価コメントが寄せられた。「PELSTEは、地理的な差異を乗り越えて各国各地の教室をつなぐ重要な論点を示し、それに貢献している点で可能性はきわめて大きい」「PELSTEの強みは、平和教育や授業研究に関する時空間を超えた認識論的な学習コミュニティを育成できることである」「PELSTEは、平和教育と授業研究を学際的に統合する点で大きな可能性を秘めている」。あわせてPELSTEが、研究者と実践家がグローバルな研究ネットワークを持続的に構築していく場になることへの期待が示された。



▲成果報告はこちら